「血潮したたる主のみかしら」（パッヘルベルによるアレンジ）

今回は前回の曲と同じ旋律を基に、ヨハン・パッヘルベル(Johann Pachelbel，1653-1706)によるアレンジをお届けしたいと思います。パッヘルベルといえば、「パッヘルベルのカノン」が有名ですが、（よく、卒業式や結婚式などお祝い系式典のBGMに使用されていますね。）彼はドイツ人であり、バロック期のオルガニスト、教師、作曲家であったことはあまり知られていないかも。さらに、バッハよりも年上ということに驚く方もあるかもしれません。現代の私たちの耳にも親しみのある、まれなバロック作品の一つといえるでしょう。

彼はニュルンベルクという南ドイツで活躍したオルガニストで、このように賛美歌のメロディを基にした数多くのオルガン作品が残されています。礼拝の前奏に、その日歌われる賛美歌のメロディをアレンジすることは当時のオルガニストにとって大切な仕事でした。会衆はその前奏を聞くことにより、礼拝のための心を整え、さらにその日に歌う賛美歌のメロディを予習できました。そのため、今日、同じタイトルの前奏曲がオルガン作品に数多くあるのはそういった理由からと思われます。

演奏と文章　山嵜美奈 教会音楽スタッフ